

釋迦牟尼佛と阿彌陀佛

芳岡良音

阿彌陀佛や西方極樂のことが説かれていた經典はおよそ八十二部あるが、(異譯經典と佛名經類と唐以後傳譯された密教經典とは含まれない)その所説を通讀して第一に氣付かれることは、阿彌陀佛を見ることが到る處に記されていることである。初期無量壽經には阿彌陀佛の聲を聞くということが繰返し記されて居り、(大正藏一二 282c, 285a, 299b, c, 303a, 313b, 317b)授記を期待している經典もある。三曼陀殿陀羅

經等にあるように、實際佛の居られる刹に生れ、常に佛を見、佛と共にありたいというのが、念佛仰の中核をなしている。つまり釋尊は死なれたが、何としても生きた佛に會いたいと言っているので、阿彌陀佛信仰が釋尊の入滅という歴史的事實に端を發していることは明かである。私は先に無量壽經の教説の資料が阿含部の涅槃經にあることを指摘したのであるが、(「大無量壽經の成立史的研究」(ト)49)竺法護譯方等般泥洹經(大正藏一 11 325c)法顯譯大般泥洹經(同 857c, 866c, 886a)曇無讖譯大般涅槃經(同 371b, 383c, 424a, 509a)竺佛念譯

菩薩處胎經(同 1028a, 1051a)同中陰經(1070a)曇無讖譯大方等無量經(1106c, 1107a)那連提耶舍譯大悲經(955b)等大乘涅槃部經典に一樣に阿彌陀佛や極樂世界のことを記されていることに注目する必要がある。

從來一般の佛陀禮拜は舍利塔に對して行われていた。然し釋尊との時間的空間的な隔りが大きくなつて來ると、このような遺物崇拜には満足せず、もつと直接的な佛との接觸が要求される。佛像禮拜はこのような要求によつて生れて來たものである。後漢代失譯の作佛形像經に「佛去後我恐不復見佛、我欲作佛形像恭敬承事之……壽終皆生阿彌陀佛國」(大正藏一 六 288a……)とあつて、見佛の欲求から佛像禮拜が興り、彌陀信仰の成立がこれと深い關係があることを物語つてゐる。私は先に無量壽經の成立地はバミアンであろうと論じたが、(「無量壽經と説出世部」印佛研一 一)塔婆の普及が玄奘の記録を見ても北印度の迦濕彌羅、呾叉始羅、健陀羅、烏仗那から、アフガニスタンの縛喝、迦畢試、漕矩吒に及んでいる

が、梵行那に塔婆がないことがこれを傍證しているように思われる。

阿彌陀佛のことが説かれている諸經典を通觀して第二に注目されることは、阿彌陀佛に王者の風格があることである。阿彌陀佛の前身を記した經典の内前身が轉輪聖王又は國王であつたとするものが六（無量壽經、慧印三昧經、悲華經、賢劫經八、決定總持經、大集會正法經）太子又は王子とするもの六（無量門微密持經、賢劫經一、德光太子經、法華經、阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經、觀察諸法行經）單に出家であつたと記すもの七（觀無量壽經、生經、賢劫經一、濟諸方等學經、大法炬陀羅尼經、大乘寶要義論中引用の覺智方廣經、觀佛三昧海經）で、國王又は王子であつたとするものが圧倒的に多い。これは淨土の觀念が阿含部涅槃經に説く大善見王、即ち釋尊の前身たる轉輪聖王の都城に由來するにるのであつて、（拙稿「大無量壽經の成立史的研究」も参照）クシナガラにあつたという大善見王の都城に極樂淨土が結びついていることは、大乘の涅槃經に「過去久遠阿僧祇劫時、世有佛名難提跋檀如來應供等正覺、出興於世亦常於此拘夷城住、時此世界廣博嚴淨、譬如西方極樂國土」（大正藏一一・866c・383c）と云い、純陀供養の條にも佛の威神力によりその地が衆寶莊嚴西方極樂國土の如くなつた（同857c・896a・371b・424a）と記している所にも暗示されている。

阿彌陀佛を讚仰している無量壽經の説相と、釋尊の讚仰を

主題としている法華經や涅槃經の説相とを比較して見て著しく違つているのは、法華經や涅槃經では佛を慈父の如く説いているのに、無量壽經では阿彌陀佛が王者のように説かれていることである。法華經では火宅の喩や長者窮兒の喩等に佛を慈父にたとえているばかりでなく、佛弟子は佛の子であるということが到る處に説かれている。涅槃經でも佛の衆生を見ること一子の如しというような表現で、佛の大悲が繰返し説かれている。無量壽經では「作比丘者、皆是我子孫」（大正藏一一・312c）というような表現もあるが、佛を特に慈父のようにな説いている所はなく、阿彌陀佛は正法を以て刹を治めている聖王の如くである。梵本では *narendra* という國王に對する呼稱で佛を呼んでいる。（中村元「極樂淨土の觀念のインド學的解明とチベットの變容」印佛研一一二）初期無量壽經に觀音勢至のことを記して「諸菩薩中、有最尊兩菩薩、常在佛左右坐侍政論、佛常與是兩菩薩共對座、議八方上下來現在之事」（大正藏一一・308b・290a）と云つているのは、兩菩薩が大 臣又は最高顧問官として、王に侍して國政を議しているように見える。その後「善男子善女人、若有急恐怖遭縣官事者、但自歸命是蓋樓亘菩薩、無所不得解脫者也」（308b・290a）とあり、觀音は普門示現で、利益多端であるべき管なのに、何故か官憲の迫害のことだけを問題にしているのか、一見不思議のようであるが、實はこゝでは政治の姿勢を正すこと

が問題なのである。また大阿彌陀經に「佛諸所行處、所經過歷那國縣邑丘聚市里莫不豐熟、天下太平、日月運照、倍益明好、風雨時節、人民安寧、強不臨弱、各得其行、無惡歲疾疫、無病瘦者、兵革不起、國無盜賊、無有寇狂、無有拘閉者、君臣人民莫不喜踊、忠慈至誠各自端守、皆自守國、雍和孝順、莫不歡喜、有無相與布施德、心歡樂與皆敬愛、推讓義謙遜、前後以禮敬事、如父如子、如兄如弟、莫不仁賢、和順禮節都無違諍、快樂無極」(同 3:19 a, b)とあるのは、佛の威神力による理想的な國家社會の實現を説いたものに外ならない。平等覺經の重誓偈に「復爲大國王、富豪而自在、廣以諸財寶、普施於貧苦」(同 3:21 a)と云い、無量壽如來會に「彼極樂界、無量功德、具足莊嚴、國土豐稔、天人熾盛」(同 1:106 a)とある。我々は淨土建立ということに政治的な面から理解すべきものがあることを、卒直に認めねばならぬのではなからうか。阿含部涅槃經の初めに、釋尊が Vajir 國を不滅の理想國家として推奨してられる。佛教の僧伽が Vajir 國のような共和政體に範をとつて企圖された理想社會であつたことは、諸先輩の指摘された通りである。印度では國王は掠奪をことゝすること盜賊に異ならず、人種言語等の雜多な印度人は國家意識が稀薄で、印度人の統一感情は宗教に關する共同の自覺によつて僅かに支えられていたので、宗教的な法に支えられた國王なき理想社會が淨土であつたのである。

轉輪聖王は原始經典に早くから現れているが、(S₁ 254; [Thag 82]) 轉輪王は佛との引合いに出されて居り、佛は法輪を轉ずる無上の法王だとされ、三十二大人相を具するのは佛と輪王だと云い、釋尊は輪王が七度舍利を埋めたクシナガラで入滅されたと云い、釋尊の葬儀と造塔は輪王のそれに準じて行われねばならぬとされている。(藤田宏達「轉輪聖王について」宮本正尊教授還曆記念論文集 186) 阿育王は兵杖を用いず、正法によつて治めるといふ佛教の政治理想を實現した人であり、阿育王經や阿育王傳では、阿育王を轉輪聖王としている。慧印三昧經に、阿彌陀佛の前身たる轉輪聖王慧上が、佛涅槃後國縣に塔六十四億を起したと記しているのは(大正藏一五 564 a-b) 明かに阿育王のイメージによつていのである。また佛教の擁護者として有名なメナンドロス王の遺骨が、佛舍利の時のように諸國に争い分けられたと云い、その鑄造した貨幣に「救い主である Menandrou 王の」と刻まれているのは、メナンドロスがシュンガ王朝に對抗し、佛教を守護したためであるという。(中村元「インド思想とギリシア思想との交流」40—42) Milindapanha には法身佛の實在を説き(南傳藏五九上 153) 罪深き人も臨終に念佛すれば生天すると云い、(同 174) 受刑者でも一束の蓮華を世尊に捧げれば、九十一劫の間惡趣に赴かないと説く等、(同 192) 淨土教に連なるものがある。(金倉圓照「印度中世精神史」146) 佛像の出現

にギリシヤ人の活動があつたことは、改めて言うまでもない。私はアシヨカとメナンドロスを結ぶ佛教擁護の風潮がカブール河域のギリシヤ人の勢力の下で残存し、温存された佛教の古い政治意識が一つの基盤となつて、阿彌陀佛信仰の生長を見たのだと思う。末法時の佛教護持と阿彌陀佛信仰とが深い連りがあることは、先に指摘した通りである。(普賢菩薩と無量壽經「印佛研一三ノ一」)更にまた私は先に阿彌陀佛が原始至上神 Supreme Being と)の Varuṇa 信仰と關連があることを指摘したが、(阿闍佛と阿彌陀佛「印佛研一〇ノ二」)中村元教授によれば、Varuṇa には王者の面影があり、天の法則の擁護者とされて居り、選舉された王はこの Varuṇa の權威によつて位についたという。(「印度古代史上」72, 103)阿彌陀佛が王者の性格を持つ理由が、こゝにもある譯である。法華經や涅槃經になると成謂五濁惡世で、政治的な張りのある傳統も失われていたので、佛の大悲が父母の慈愛のような身近かなもので説かれるようになったのであろう。

阿彌陀佛はまきれもなく釋尊の佛としてのイメージから生長したのであるが、出來上つて了うと彌陀と釋迦とが對立的に説かれるようになる。竺法護譯の生經に、釋尊が前生に首達比丘であつた時、彌陀の前身たる年少の惟先比丘の名聲を憎み、誹謗して地獄に墮ちたという。(大正藏三 107c)また同じ竺法護譯の濟諸方等學經では、因果応報を説き諸々の善

行を勧めた淨命比丘を、たゞ空を説いて諸行を輕んじた爲法比丘が悪口して地獄に墮ちたが、この淨命が彌陀、爲法が後の釋迦で、釋迦が五濁の世に成佛しなければならなかつたのはこのためだという。(同九 376a-b)このような扱い方に對して、五濁の世に現れて佛となり、惡機の衆生を相手に極難信の法を説き、救済に努めた釋尊は稱讚されねばならぬという主張が現れたのは當然である。(持心梵天所問經、阿彌陀經、大法鼓經、觀世音菩薩授記經、寶星陀羅尼經、如幻三摩地無量印法門經、入楞伽經、大集經)更に釋迦の淨土は決して西方極樂に劣るものではないという主張(法華經、大乘諸涅槃經、無字寶篋經)や、西方極樂よりも遙かに優れた淨土があるという主張(華嚴經、文殊師利佛土嚴淨經、寶積經文殊師利授記會)が現れ、更に悲華經になると、彌陀が因位の時發願した通りの世界が西方に既にあつたので、彌陀はそこへ行つて成佛したのだと云い、淨土建立という彌陀信仰の基本的な教説を抹殺して下い、穢土を避けて淨土を願取するような菩薩は猛健大丈夫ではない、苦海の衆生を捨てて顧みないようなことでは深重大悲を持つた分陀利華の如き大菩薩とは言えないと云つて、彌陀を貶し、釋尊を稱揚している。これは後の淨土教の逃避的な性格を非難しているのであるが、政治意識を背景とした淨土教本來の性格が忘れられていることが、非難する側でも非難される側でも共通に反省されねばならぬことであらう。